

庄野英二と坪田譲治

— 雑誌『びわの実学校』を中心に —

伊藤 かおり

一 はじめに

庄野英二の児童文学作品を概観するにあたっては、当時児童文学界で指導者的な立場で活躍していた坪田譲治との関係を抜きに語ることはできない。坪田は一九六三（昭和三八）年から雑誌『びわの実学校』を主宰し、その後進の育成に努めた。庄野も『びわの実学校』の同人として編集に携わり、小説や童話を寄せた。ここでは、『びわの実学校』第一期を軸に庄野英二と坪田譲治の關係に焦点を当てて見ていきたい。

二 庄野英二と坪田譲治の出会い

坪田譲治は一八九〇（明治二三）年に岡山県で生まれた。早稲田大学英文科を卒業したが、童話との関わりは

在学中に遡る。在学中の一九〇八年、坪田は友人の紹介で小川未明を訪ねた。以降、未明との交流は生涯にわたる。しかし、坪田が作家として出発するのは他と比較して遅かった。二十代の後半から作品を発表し始め、作家として高い評価を得たのは一九二六（大正一五）年に雑誌『新小説』に発表した「正太の馬」によってだった。元は一九二〇年に同人誌に発表されたものである。『新小説』に発表後、間もなく短編集『正太の馬』を出版するが、まだ一般に知名度を得るには到っていなかった。

坪田の作品には子どもが登場するものが多く、その描写が特に高い評価を得ていたため、童話に筆を染めることとなった。一九二七（昭和二）年、「河童の話」を『赤い鳥』に発表し、以降、『赤い鳥』の主筆である鈴木三重吉に師事、同誌に童話を次々と発表していく。

しかし、文筆のみでの生活は厳しく、一九二九年に帰郷して実家の島田製織所の経営に携わる。坪田讓治の父が開業したこの会社は主にランプの芯の製造を行っていたが、共同経営者や親族との内紛を繰り返していた。一九三〇年に兄が自殺すると間もなく母も亡くす。坪田は島田製織所の専務取締役となるが、一九三三年七月、株主総会で兄の息子の根回しにより専務取締役を解任される。筆一本で立つしかなかった坪田は即日上京した。この出来事をもとに執筆されたのが出世作となる「お化けの世界」である。そして、これが庄野英二との出会いのきっかけとなった。

坪田は一九三五年、「お化けの世界」を『改造』に発表し、これは間もなく単行本化された。大人の事情に翻弄される善太・三平兄弟を主人公とした作品だが、二人の父が置かれた状況は二年前に坪田が置かれていた状況そのものだった。主人公たちの父親は会社経営で窮地に陥り、妻と娘を東京に避難させ、残った息子たち（善太・三平）と生活する。兄弟は父の窮地を漠然とであるが感じ取り、家族を失うのではないかという不安に襲われる。庄野は関西学院在学中、この作品を『改造』で読み感動する。庄野は「読後、一か月ほどの間、私は『お化けの

世界』の酪酊状態にあった。」(『追慕略年譜『びわの実学校』以前)と回想している。当時新聞部所属の庄野は、『関西学院新聞』のために坪田と藤沢桓夫に随筆を依頼した。夏休みにこの時の原稿料を持って上京し、坪田邸を訪問する。坪田の長男・正男が芦屋の幼稚園で、帝塚山学院出身の阪田寛夫の兄と友人だったこと、また庄野が関西学院哲学科で心理学も学び、正男も心理学を専攻していたため親しくなる。「後々、坪田先生は「正男は、庄野さんを私からとってしまおうとしている。」と冗談をいわれたことがあった。」(『追慕略年譜『びわの実学校』以前)というほどの意気投合ぶりだった。

坪田が童話を発表し続けた『赤い鳥』は一九三六年に鈴木三重吉の死をもって終刊となる。同年に坪田は「風の中の子供」を『東京朝日新聞』に連載、すぐに映画化もされ、筆一本で立つという決意が実ることとなる。

以降も坪田譲治と庄野英二の交流は続いたが、庄野は関西学院卒業後の一九三七年一月、徴兵により大阪の歩兵第三十七連隊に入隊、同年四月末には旧満州へ移駐のため大阪を後にすることとなる。一年で除隊となるはずだったが、日中戦争開戦のため徴兵期間は延長された。一九四一年一月七日、庄野は所用で上京し坪田邸を訪問する。太平洋戦争開戦の前日のことである。この後、戦後になるまで二人が会うことはなかった。

庄野がジャワ島・ジャカルタの俘虜収容所に勤務していた一九四三年、坪田も海軍報道班員として同じくジャワ島のスラバヤへ赴くこととなった。しかし、軍務を離れることができず坪田とは会うことができなかった。逆に庄野が軍命で帰国中に坪田がジャカルタを訪れ、庄野に置き手紙でインドネシア語の童話の本の翻訳を依頼する。庄野はその本を知り合いに翻訳してもらいスラバヤに返送するが、これは後に坪田の手で同じく海軍報道班員として徴用されジャワ島を訪れた佐藤春夫に渡される。坪田は一九四四年三月に帰国したが、庄野は戦後レンパン島に抑留され、帰国は一九四六年になった。

帰国して仕事のない庄野に、坪田は童話の執筆を依頼する。そうしてできたのが実質的なデビュー作となる「朝

風のはなし」である。原稿を送ると間もなく坪田から「ケツサクドウワオメデトウバンザイ」という電報を受け取る。この作品は一九四七年一月、坪田が創刊した雑誌『童話教室』第一号に掲載された。坪田譲治と同様、作家としては遅いスタートとなった。

庄野は一九四八年から帝塚山学院の教員を務めることとなったが、一方で一九五五年に作品集『子どものデッキ』、一九六一年に随筆集『ロッテルダムの灯』を刊行するなど、文筆家としての仕事も軌道に乗る。『子どものデッキ』では巻頭に坪田への献辞を載せ、変わらぬ深い尊敬の念を示し続けた。

三 戦後の児童文学界

一九四六（昭和二一）年、戦争の反省に立って民主主義の理想を推し進める児童文学作品の創造と普及を目指すということを柱の一つに、児童文学者協会（後の日本児童文学者協会）が発足した。一九四九年には初代会長として小川未明が就任する。坪田譲治も児童文学者協会に参加し、作品を精力的に発表する。戦前の作品も続々と再刊行された。〈童話〉と言えば小川未明、坪田譲治、浜田広介という時代である。

やがて一九五〇年代に入ると若手を中心に児童文学界で新たな潮流が起こる。いわゆる〈童話伝統批判〉と呼ばれる一連の流れである。その先駆けとなったのが、一九五三年、鳥越信、古田足日らを中心とする早大童話会のメンバーが発表した「少年文学の旗の下に！」（『少年文学宣言』）である。早大童話会は坪田譲治が発足に深く関わったサークルであるが、当時のメンバーたちは児童文学の主流であった童話の先行きに見切りをつけ、新たな児童文学を目指そうとする動きを起こした。それが未明や坪田の否定につながるのには皮肉でもあり当然のな

りゆきでもあった。一九五九年には古田足日が「さよなら未明——日本近代童話の本質——」（『現代児童文学論』所収）で小川未明の功績と才能を他の追隨を許さないものと認めつつ、今後の作家は、小川未明だからこそ生かすことのできた童話という形式を脱却しなければならないと主張した。一九六〇年には石井桃子・いぬいとみこ・瀬田貞二・松居直・渡辺茂男・鈴木晋一による『子どもと文学』が中央公論社より刊行された。この本は英米児童文学に造詣のある執筆者六人の研究会の成果をまとめたものである。ここで小川未明、坪田譲治、浜田広介、さらに千葉省三が徹底的に否定される。その論調は非常に無理のあるものだが、新しい児童文学を推し進めていく上では当時は致し方なかったものであろう。この流れに対し、坪田譲治は後年、『びわの実学校』第四二号（一九七〇年八月）の「あとがき」で次のように述べている。

「トナカイ村」という児童文学誌は創刊以来もう四十七号になるそうですから、児童文学愛好の方なら、きっと御存じと思います。このトナカイ村の四十七号に、小西正保氏の石井桃子論がありました。初めから終わりまで、実に明快で、これほどの児童文学論を今まで読んだことがなかったように思います。つまり、一言でいってみれば、石井さんの作品は、リアリズムで石井さんの童話についての主張は、ファンタジーであるということのようです。少しも感情をまじえず、石井さんに敬意を表しながら、言うことは遠慮なく言われて、読後感が、実にスガスガしく、小西さんの人柄の善良さが思われました。ところが、この石井さんのファンタジー論の四五年前に、鳥越信氏と古田足日氏の少年文学宣言というのがあるのです。これは散文精神を説いて、リアリズムを主張したように記憶しております。言ってみれば、石井さんたちの「子供ママと文学」と鳥越氏等の少年文学宣言とは、互に反対の立場なんです。ところが、双方に論争もなく、今になるまで、仲むつまじく児童文学の仕事にいそしんでおられる。これはなぜでしょう。私は悪口を言うために

これを書くではありません。つまり、この両派は、現代児童文学の新興勢力なんです。従って古いものは、こわさなければなりません。初め古田氏、鳥越氏は、リアリズムを振りかざして、旧勢力に打ってかかったのです。すると今度は、石井さんがその裏からファンタジーを武器として、旧児童文学を攻め立てました。つまりファンタジーとリアリティは童話の二つの柱です。それを表と裏の両方から、攻めたてたわけですが、そうなると、旧派も奮闘せざるを得ません。然し旧派は理論に弱いものですから、作品の方に一生懸命になって対抗しました。それで、当代日本の児童文学は、今までになく盛になりました。メダシ、メダシ

このような中で刊行されたのが『びわの実学校』である。『びわの実学校』は同人たちの貴重な発表の場であり、新人の育成の場でもあった。実作によって日本の児童文学界を牽引していく媒体となったのである。

四 『びわの実学校』刊行

坪田譲治は一九六一（昭和三六）年、自宅に「びわのみ文庫」を開設した。また公立図書館が充実していない頃で、こうした私設図書館の役割は非常に大きかった。ここを拠点に、一九六三年、『びわの実学校』が創刊される。

『びわの実学校』は坪田が主宰した同人誌であり、当初は制作費用を坪田自身が負担した。児童文学者協会に共に参加した関英雄の勧めで創刊された。関英雄は第一期を通して編集同人に名を連ね、坪田と共に『びわの実

学校』の精神的支柱となる。『赤い鳥』のような新人の発掘・育成の場となる雑誌を目指して創刊され、その方針は最後まで貫かれた。第一期は一九六三年から一九八六年まで、隔月刊、B5の判型で、全部で一三四号刊行された。第二期は一九八六年から一九九四年にかけて季刊で発行される。発行所はびわのみ文庫、後にびわの実学校となった。六五号までは坪田が制作費を捻出していたが、六六号からは講談社が発売元となり編集作業の一部と制作費を負担した。創刊当時の同人には庄野英二の他、今西祐行、松谷みよ子、大川悦生、水藤春夫、そして庄野の全集編纂に携わった前川康男、坪田に『びわの実学校』創刊を勧めた関英雄などがある。同人の大部分が早大童話会の出身だが、庄野や松谷みよ子、大川悦生のような早大童話会に関わらない人材も広く受け入れた。このように戦後の児童文学界を支えた作家が多く名前を連ねている『びわの実学校』だが、ここからは庄野英二を中心に見ていきたい。

『びわの実学校』創刊の直前、庄野の代表作となる『星の牧場』が理論社より刊行され、既に児童文学作家として今後が期待される存在となっていた。大部分の同人が関東在住であるのに対して庄野は関西に在住し、教育者としての仕事も持っていた。そのため、実際に編集を担当したのは数えるほどしかないが、『びわの実学校』の活動には積極的に関わっていたようである。

庄野英二は第一期を通して一五作の児童文学作品を発表している。その全てを挙げると次のようになる。

「水の上のカンポン」 一号（一九六三年一〇月）

「大きいプラオ」 六号（一九六四年九月）

「桶屋甚八の話」 一六号（一九六六年五月）

「からくり牛とふしぎな人形」 二七号（一九六八年三月）

「白い帆船」三六号（一九六九年八月）

「原音松さんのこと」四〇号（一九七〇年四月）

「テラスの子ども」五〇号（一九七一年二月）

「アルバム」五七号、六〇〜六二号（一九七三年二月、九月〜一九七四年二月）

「スリランカの友だち」八〇号（一九七七年三月）

「キツネとムジナ」九〇号（一九七八年一月）

「ライオンの噴水」一〇一〜一〇六号（一九八〇年九月〜一九八一年七月）

「黒い腕」一〇九号（一九八二年一月）

「パヌアと主人」一一一号（一九八二年五月）

「聖牛シーダラハ」一二五号（一九八四年九月）

「五月十二日のちよつとした大事件」一三一号（一九八五年九月）

その他、随筆や挿絵もある。多作ではないが継続的に作品を発表しており、これらの作品にはその時その時の庄野の興味も反映されている。「水の上のカンポン」「大きいプラオ」は従軍していたインドネシアの風習、言い伝えを材としている。一九六七年ごろからは熊野灘沿岸でフィールドワークを重ねていたが、その興味が反映されているのが「桶屋甚八の話」「からくり牛とふしぎな人形」「白い帆船」「原音松さんのこと」「キツネとムジナ」である。一九七九年にはオーストラリアの木曜島を訪問しているが、そこから材を得たと考えられるのが「黒い腕」である。また、幼少期の頃を語った随筆的な作品として「アルバム」があり、庄野が初期から繰り返し描いてきた、皆が仲良く協力し合って生きている調和の取れた小さな共同体を舞台にした作品として「ライオンの噴

水」がある。

庄野は『びわの実学校』の編集、寄稿以外の活動にも積極的に関わった。「びわの実学校修学旅行」への参加である。これは坪田を中心に同人たちで児童文学の聖地を訪問するというものである。一九六九年には、関英雄が坪田に後に『びわの実学校』となる新雑誌の創刊を勧めた長野県白馬へ行く。翌年は宮沢賢治の面影を求めて岩手県花巻へ、そして庄野のみ途中で他の同人たちと離れて柳田國男『遠野物語』の世界を求めて遠野へ赴く。また一九七二年には小川未明が生まれ育った新潟県高田を訪れた。この間、庄野はソヴィエト連邦へ旅行し、その様子を『レニングラードの雀』にまとめているが、同人の海外旅行については坪田自身が『びわの実学校』の「あとがき」で逐一報告している。

このように庄野はできる限り『びわの実学校』に携わり、その活動を支えていた。他の同人たちも坪田への敬愛は深く、一丸となって雑誌の運営に当たった。一九八二年に坪田は亡くなるが『赤い鳥』のように主宰者の死をもって終わることはなく、その後も遺志を引き継ぐ形で刊行された。一九八四年に岡山市立中央図書館前に建立された坪田譲治文学碑の除幕式が行われたが、坪田の遺族と共に『びわの実学校』同人の一人として庄野は出席している。その後、一九八六年に同人たちの話し合いの末、『びわの実学校』第一期は一三四号をもって終刊することとなった。関英雄と表紙を担当し続けた山高登は『びわの実学校』から退くこととなったが、ほとんどの同人が残って間もなく第二期が刊行される。庄野も『びわの実学校』の第二期を支えていくこととなった。

五 終わりに

庄野英二が一九七五（昭和五〇）年、帝塚山学院大学学長に就任した際、坪田譲治は『びわの実学校』六九号（一九七五年五月）の「あとがき」で次のように述べている。

同人の庄野さんが、今度、帝塚山大学（まつか）の学長にられました。おめでとう存じます。庄野さんは、三、四年前、大阪の教育委員と云うのになられたこともあり、童話とそつちと、本業はどちらかと云う感じでした。今度も、どっちが、どっちか解りませんが、庄野さん百年の後、あとに残るものは、やはり文学作家のようには思われず。身びいきと云うところでしょうか。

『びわの実学校』には同人が多く、そのため坪田は庄野に関して特に多くを語っているわけではない。しかし、この短い文章からは、坪田が庄野の才能を児童文学作家（童話作家）としてよりも、それも含んだ文学作家という位置付けで高く評価していたことがわかる。坪田は小説と童話、両方の分野で大きな業績を築いた。両方の分野で善太と三平など共通の人物を主人公にした作品を多く書いている。小川未明が小説家として出発し、その最盛期に童話専門の作家に転身したのとは対照的である。坪田は敢えて小説とも児童文学とも取ることのできる作品を残したが、庄野もそれと似たところがある。『びわの実学校』に掲載された「白い帆船」は小説とも児童文学とも読めるものである。また、代表作『星の牧場』なども大人、子どもを問わず、幅広い読者を獲得した。一九五〇年代の〈童話伝統批判〉の急先鋒を務めた鳥越信は『日本児童文学』一九七三年八月臨時増刊号に発表した「庄野英二作『星の牧場』」の中で、『星の牧場』は郷愁の文学であり、ゆえに児童文学ではない、逃避・

退廢の文学であると断じている。郷愁の文学は児童文学たりえないのか、また逃避・退廢の文学を批判的な意味で用いているが逃避や退廢の文学が優れた文学になりえないのかという問題がここにはあり、その論拠が非常に希薄であるという難点がある。しかし、ここで注目したいのは小川未明や坪田譲治が〈童話伝統批判〉で否定された論法が、庄野英二の作品に対して使われているということである。庄野と坪田は例えば子どもの描き方、社会との関わり方という点で違いはある。しかし、文学についての考え方は『びわの実学校』同人たちの中では、庄野は最も坪田に近いところにあつたのではないだろうか。

参考文献

- 庄野英二「追慕略年譜『びわの実学校』以前」(『びわの実学校』一一三号、一九八二年九月、びわの実学校)
- 庄野英二『ロッテルダムの灯』二〇一三年七月、講談社
- 『現代日本文学大系 三三二』一九七三年一月、筑摩書房
- 坪田理基男「ランプ芯会社にまつわる話——父譲治の作品の周辺——」全一〇回(『びわの実学校』一〇八号～一一九号、一九八一年一月二〇日～一九八三年九月二〇日、びわの実学校)
- 砂田弘「その生涯と文学」(『日本児童文学』第三六卷第六号「特集・坪田譲治——生誕百年」一九九〇年六月、文溪堂)
- 鳥越信「庄野英二作『星の牧場』」(『日本児童文学』第一九卷第一〇号(八月臨時増刊 現代日本児童文学作品論) 一九七三年八月、盛光社)